

見つめ直す

七月、夏の日差しが照りつける中、近所の人々のがやがやとした声が聞こえてくる。その声で私は（今年も始まった）と思う。ここ福住は、夏と冬、「氷祭り」という行事が行われている。この祭りは、標高が五百メートル近い福住の涼しい気候を利用した、氷室での氷作りが中心だ。

冬、氷室に氷を入れ、夏まで待つ。夏の氷を出す。冬から夏にかけての氷の残量を調べる。この時のどきどきとした緊張感がたまらない。事前にどきどきとした緊張感がアンケートが配られ、その中で一番近かった人が景品をもらえる、そんな行事だ。毎年出店が出てそれを目当てにたくさんの子どもが集まる。今では遊びのようになっているの行事だが、昔はどのような意味があったのか、ふと疑問に思い、私は祖母に聞いてみた。

天理市立福住中学校 二年

岡本 芽依

「福住は標高が高くて涼しい所やから、冬作った氷を夏に出して、天皇に献上しててん。」私は次に、なぜ、福住の氷が使われたのか疑問に思って尋ねた。すると祖母は、「こここの水はきれいだっし、昔は氷というのがすごく貴重なものやっしから。」確かに納得した。今は氷なんて冷凍庫ですぐ作れるし、水は蛇口をひねれば出るが昔はそんなに難しかったのかと、その時強く感じた。私の家の近くにある氷室は、平成十一年に地域の人の手により復元された。そして「日本書紀」に日本最古の氷室の記述が出てくることから氷室発祥の地として氷祭りをしようということになった。毎年三トンの氷を入れられている。一昨年は猛暑で三キログラムしか残らなかった氷が、昨年は百九キログラム残っていた。

私は学校から帰ると、毎日ニュースを見る。ある時、私たちと同じ年齢くらいのアフリカの子供が映っていた。一日の暮らしの様子だった。その中で、特に印象に残ったのが、水くみだ。生活に必要な水を子供が川までくみにいかなければならないのだ。川の水は決してきれいとはいえない。その上、何十分も、何時間も歩かなければいけない。その重たい水をもつて。こんな国が地域が世界にはいくつもあるんだ。その時、水道に水をくみにいくのもめんどくさがる自分がとても恥ずかしく思えた。

日本は、技術が進歩し、今はとても快適な暮らしができる社会になっている。しかし、その便利さに慣れきって、「水」を大切にしている人がいるのも事実である。実際、私も、水を出したままにしていたり、汚れているお皿をふきとらず洗い流してしまったりするなど、思い当たることがたくさんある。しかし、こういう小さな行動の一つ一つが積み重なって、水を汚す原因となっている。世界にはやっとの思いで飲む人々がいる。私たち日本人は、今のような水を汚す行為や無

駄遣いすることを続けてはいけない。早急に自分の行動を見直し、改善することが必要ではないだろうか。出しゃばなしの水をとめることも、きたない水をそのまま流さないことも、水を何かに再利用することだって私たちはできる。すぐに変化はあらわれないだろう。それらは小さな行為だからだ。でも、きれいにしてしよう、という意識をもつのもたないのでは大きな差が生まれる。福住の復元氷室は地域の方々がいくつもの努力を重ねて造られた。私はこの氷祭りをもう一度おこした地域の人々の思い、努力を大切にし、これからも水としっかり向き合っていきたい。私たちも少しづつ自分で行動すればいいのだ。私を習慣化しようと思う。